

「インドネシア大学スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学文学部4年 近藤悠人

今回の派遣では、インドネシア大学 Universitas Indonesia（以下、UI）において言語学習と文化体験、日本語学科の学生との交流の機会を得た。午前の講義では、インドネシア語 Bahasa Indonesia を学んだ。インドネシア語は声調がなく発音も比較的容易で、ラテン文字を利用し、格変化や時制による語形変化がない言語である。また語順は SVO であり、後置修飾する点に留意しながら単語を置くことで意図が伝わるため、馴染みやすい言語だと感じた。片言ながら日常生活で挑戦し、現地の方を戸惑わせながらも意思疎通を図ることができた際には、学習の醍醐味を味わうことができた。また歴史 sejarah はアラビア語に、タオル handuk はオランダ語に由来するなど、語彙が地域の歴史や文化の多層性を反映している点も興味深かった。友人や先生からは、出身地の言語が標準語と異なること、結婚相手の母語が異なることなども伺った。結果として、標準語の文法と語彙だけでなく、当地域の多様な言語環境への関心を深める機会になった。

午後からは舞踊や蠟付け染め、ガムランといったインドネシアの文化の体験や、日本語学科の学生との共同発表の準備に費やした。不器用ながら舞踊や音楽などに挑戦することで、独特の身体技法によって各民族の文化が脈々と受け継がれていることを学んだ。また日本語学科の授業見学の際には、日本語からインドネシア語への翻訳技法が取り上げられていた。その具体例として、谷崎潤一郎『蓼食う虫』やマイナーなライトノベルが紹介されるなど、学生の日本文学への幅広い関心や優秀さを垣間見ることになった。共同発表では、日本料理とインドネシア料理における辛さの違いを取り上げることになり、両文化の相違点について理解を深めることになった。

上記の活動以外の時間には、ジャカルタ Jakarta、デポック Depok、ボゴール Bogor といったジャカルタ大都市圏の各地を訪問することになった。その際、特に以下の4点について問題関心を深めた。

1点目は、日常生活、地域社会における宗教的影響力の強さと多様性である。街角にはモスクが立地し、商業施設・観光施設などにも musholla が設置されていた。また街中を歩く女性の多くがヒジャブを被り、決まった時間に礼拝している光景からは、イスラム教国としての印象を強めた。他方、インドネシア各地の環境保護運動を取り上げた映画『SEMESTA』を鑑賞した際には、イスラム教指導者のみならず、フローレス島の神父が登場し、共同体をまとめながら水力発電計画を実施する場面が見られた。イスラム教以外の宗教も許容され、かつそうした宗教勢力が地域の社会関係資本を維持する主体の一つであることを考えさせられた。

2点目は、ナショナリズムと国民国家形成である。うつくしいインドネシア・ミニ公園 Taman Mini Indonesia Indah では、インドネシア全土を縮小して再現した庭園や各州の建築物が展示されていた。国是である多様性の中の統一 Bhinneka Tunggal Ika を可視化し、統治主体と同じ俯瞰的視点で提示する意図を感じた。またジャカルタ中心部の国家記念塔 Monumen Nasional や独立宣言塔 Tugu Proklamasi、ボゴール闘争博物館 Museum Perjuangan Bogor を訪問した際には、それらの施設が独立前後の出来事の「記憶の場」であることを感じさせられた。インドネシア共和国 Republik Indonesia は、オランダ領東インドの領域を継承している。この恣意的に区画された領域内では、中華系からマレー系、パプア系まで多様な民族が分布している。この地域内で過去に起きた雑多な出来事を取捨選択し、「インドネシア共和国」に至る歴史／物語 Geschichte を紡ぎ出し、こうした「記憶の場」で（再）確認すること。それによって、多様な民族に属する人々が国民になる becoming 過程を経験し、国民国家が実現されていったのではないだろうかと思わされた。振り返ってみると、私たちの日本史も同じく物語であること、また近代初期以降、日本でも同様の過程が経られてきたことにも目を向ける機会になった。インドネシアを研究したベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』を再読し、再度、国民国家形成やナショナリズムについて考えることにしたい。

3点目は、ライフヒストリーから浮き彫りになる歴史の記憶である。派遣中、折を見てさりげなく学生や友人へのライフヒストリーを聞き取った。その結果、オランダ植民地時代や日本占領時代、独立後の社会・経済・政治的出来事が彼らの人生に影響を与えていることを実感した。例えば、スマトラ島の Jambi 出身の友人からは、日本占領時代に曾祖父がロームシャであったこと、小学生であった祖父は毎日集会があったことや君が代を覚えていること、両親はトランスミグレーション政策によって移動した場所で出会ったことを伺った。ミクロレベルの語りを丹念に収集することで、何気ない記憶の背景に社会情勢の影が潜んでいることを実感させられた。社会科学を学ぶ上で、量的データに還元できない質的データも重視すべきことを再確認させられた機会だった。

最後になるが、ジャカルタ大都市圏における都市問題の深刻化も印象に残った。慢性的な交通渋滞や交通インフラ整備の不十分さ、インフォーマルセクターの割合の高さ、厳然たる経済格差の存在など負の側面に目を向ける機会が多かった。他方、モール Mal が発達し、住宅や耐久消費財への需要の高まりがみられるなど、今後数十年間で急速な成長を遂げる国であることも確信した。私は2020年4月から、社会インフラを担う会社に経理財務として働く予定である。今回の派遣を通じて、今後の数十年のキャリアの中で、インドネシアを含む成長著しい新興国でのインフラ事業を、財政面から支持する経験を積んでいきたいという思いを抱いた。

末筆にはなりますが、今回の派遣を支援して頂いた皆さんには大変お世話になりました。また2年半ぶりにも関わらず再会して頂いたIさん、Iさん、Rさんには多大な協力を頂きました。厚く感謝申し上げます。